

ぱわっと

2012

vol.
32

特集／女性の視点を活かした防災対策

災害時であっても、女性や子ども、

高齢者、障害者などあらゆる人の人権が尊重されなければなりません。

女性の視点で防災対策を考えることは、さまざまな立場の方のニーズに対応した、誰もが安心して暮らせるまちづくりにつながっていきます。

そこで本号では、女性の視点を活かした防災対策について、特集しました。



女性の視点で「防災対策チェック」

- 地域の防災訓練に参加したことはありますか？ →3ページ①へ
- いざという時の備えはできていますか？ →3ページ②へ
- 災害時、子育てや介護を助けあえる仲間はいませんか？ →3ページ③へ
- ご近所に顔や名前を知っている人はいますか？ →3ページ④へ
- 子どもと一緒に避難所まで歩いてみたことはありますか？ →3ページ⑤へ
- 被災後の仕事についてイメージしていますか？ →3ページ⑥へ

第21回 女と男のいきいきフォーラム八王子

「人とつながる、自分とつながる ～今を生き抜くために私たちができること～」

平成24年2月25日(土)～26日(日)

会場：八王子市クリエイトホール(八王子市東町5-6)

※入場無料・託児あり(1歳から就学前のお子さん・要予約【午前・午後各15名まで】)



入場無料

平成24年2月25日(土)

講演会「私が震災で見てきたもの」

～手話通訳あり～今までの教訓とこれからの課題～

講師／正井 礼子さん[NPO法人女性と子ども支援センター、ウィメンズネットこうべ代表理事]

時間／14:00～16:00

会場／5階ホール[定員170名・申込み先着順]

正井 礼子さん

NPO法人女性と子ども支援センター、ウィメンズネットこうべ代表理事

2005年にシンポジウム「災害と女性」～防災と復興に女性の参画を～を開催。阪神淡路大震災に女性の視点から検証し、防災・復興計画の策定に女性の参画の必要性を訴えた。予測される大災害に向けて「性別に配慮した避難所の設計」「女性に対する暴力の防止」など、女性の視点からの防災・復興に関する情報発信を全国各地で行っている。被災地の女性の人権を守り、復興へのニーズや意見を反映させることを目的につくられた東日本大震災女性支援ネットワークの世話人をしている。



分科会

主夫が教える「家庭を円満にするワンポイントアドバイス」

講師／生武 真さん[主夫3年生]著者、イラストレーター]

時間／10:00～12:00

会場／11階第6学習室[定員20名・申込み先着順]

「～私の気持ちをつたえよう～」初めのアサーティブネス講座

講師／岩井 美代子さん[アサーティブネストレーナー]

時間／10:00～12:00

会場／11階第7学習室[定員24名・申込み先着順]

平成24年2月26日(日)

分科会 映画会「ベッカムに恋して」

時間／10:00～12:00

会場／11階視聴覚室[定員72名・申込み先着順]

★展示★ 会場／クリエイトホール1階(2月25日～26日)

出展団体：八王子手をつなぐ女性の会・八王子女性史サークル

※講演会・分科会・団体企画はお申し込みが必要です。お申し込み・お問い合わせは、男女共同参画センターまで。

電話◇042-648-2230 FAX◇042-644-3910

団体企画

「父子でつくる“おもしろ飛行物体”」

対象／6歳～小学6年生のお子さんとその父親(または両親)

時間／10:00～12:00

会場／11階第6学習室[定員12組・申込み先着順]

企画／レクボラNO.1

「イクメンも語る イクメンのススメ」

講師／櫻井 三樹子さん[特定社会保険労務士] 太矢香苗さん[ファイナンシャルプランナー]

時間／10:00～12:00

会場／11階第7学習室[定員30名・申込み先着順]

企画／多摩らいふサポート 協力／父親育児グループ カシュパ/P/ゆめばば

「災害時にも女性の視点を！ Part II 被災地における女性たちのこの一年」

講師／平賀圭子さん[NPO法人参画プランニング・いわて理事長、もりおか女性センターアドバイザー]

時間／14:00～16:00

会場／10階第2学習室

[定員60名・申込み先着順]

企画／八王子手をつなぐ女性の会

民間団体によるDV相談窓口

夫や恋人からの暴力に悩んでいませんか？

団体名	形式・費用	日時	連絡先
DVホットライン 八王子	電話相談・無料	月曜日／午前9時～正午	042-648-9580
国際ソロプチミスト 八王子	電話相談・無料	月～土曜日／午前10時～午後3時	0120-956-080
いっぽの会	女性同士の語り合い 1回300円	第1・第3金曜日／午後1時半～午後3時半	090-6338-4391 090-7408-1372

八王子市の行政審議会等委員への女性の参画状況

審議会とは、国や地方公共団体が重要な施策を進めるにあたって有識者等から意見を求めるため、法令・条例等に基づき設置する機関です。

市の審議会等委員への女性の参画については、昨年の33.4%から33.7%と微増しましたが、まだ女性委員数が0という委員会もあります。

女性の声を市政に活かすために、積極的に女性委員

女性の参画状況推移

区分	20年	割合	21年	割合	22年	割合
審議会等数	95		98		95	
(内女性を含む数)	80	84.2%	85	86.7%	78	82.1%
審議会委員数	1,484		1,525		1,473	
(内女性委員数)	486	32.7%	509	33.4%	497	33.7%

※数値は各年度末

なぜ、防災対策に女性の視点が 필요한のでしょうか。和光大学教授であり、東日本大震災女性支援ネットワーク共同代表を務める竹信三恵子さんにお聞きしました。

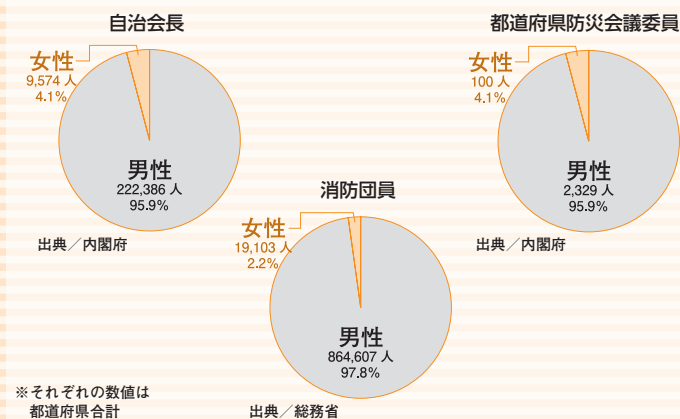
災害時の女性の問題

世界で様々な災害が起きているなか、1990年に国連を中心に始まった「国際防災の10年」の活動を機に、防災対策に女性の視点を取り入れることは世界的な潮流となっています。災害時に子どもや高齢者、障害者への配慮に加え、女性のニーズに対応した対策を行うことが、誰もが安心して暮らせる社会づくりにつながっていくからです。

これまで防災対策は男性主体で行われてきたため、なかなか女性の視点は入ってきませんでした。しかし日本でも、阪神・淡路大震災や新潟県中越地震などで災害時の女性の問題が明らかになるにつれ、女性に配慮した防災対策が求められるようになってきました。

例えば1995年の阪神・淡路大震災では、女性が男性より1,000人以上多く亡くなっています。主な原因は家屋の倒壊によるもので、中でもひとり暮らしの高齢女性が多く被害に遭っていました。経済力がなく、十分な地震対策がとられていない古い木造住宅に住んでいたことが要因の一つとされています。

【データ】防災・災害復興分野への女性の参画状況



平成22年の防災・災害復興分野への女性の参画状況をみると、都道府県防災会議委員4.1%、消防団員2.2%、自治会長4.1%で、いずれも数パーセント程度にとどまっています。この割合はここ数年、ほとんど変わっていません。

女性の視点で防災対策

表紙のチェック項目に合わせて、主なポイントをあげてみました。



◆日頃の備え◆

①女性も防災の担い手に

女性も防災訓練や学習会に積極的に参加しましょう。消防団や自治会などへの女性の参画を進めましょう。

②家族の状況に合った備えを

家族の年齢や健康状態などに合った備蓄をしましょう。また、家具の転倒防止などの家の中の対策も、家族の状況が変化すれば対応が必要です。常に家族で確認しあいましょう。

③育児や介護は一人で抱え込まずに

平常時には乗り越えられる育児や介護も、非常時には困難になります。普段から育児や介護は家族みんなで担い、さらに地域でも助けあえるネットワークを築いておきましょう。

④地域で助けあえる関係を

誰もが災害弱者になる可能性はあり、いざという時には隣近所の助け合いが不可欠です。日頃のあいさつはもちろん、積極的に地域の行事に参加し、つながりを深めましょう。

⑤避難所は子どもや高齢者と一緒に歩いて確認

妊娠中の女性や、小さい子ども、高齢者は避難に時間を要することもあります。事前に一時避難所まで歩いて確認しておくことが大切です。

⑥仕事の雇用についての確認を

被災後も安心して働き続けられるよう、自分の労働条件や社会保障の内容を確認しておきましょう。

⑦自分の地域の被害状況を想定しておく

防災はイメージ力とされています。昼間や夜間、自分の地域で災害が起きたらどんな被害が想定されるのか具体的にイメージしておきましょう。

◆安心・安全・快適な避難所にするための工夫◆

- 避難所の運営には女性と男性の責任者をたてる。
- 間仕切りをするなどしてプライバシーを確保する。
- トイレや更衣室は男女別に。
- 授乳スペースや女性専用の洗濯干し場を設ける。
- 女性や子どものための相談窓口を設ける。
- 一つの作業に、性別が偏らず、男女がともに活躍できるようにする。

東日本大震災の避難所での被災生活

では、東日本大震災の被災地での女性の状況はどうだったのでしょうか。女性支援ネットワークの活動を通して避難所で見聞した事例をいくつか紹介します。

まず切実だったのは、長引く避難生活でのプライバシー確保の問題でした。「みんな家族だから」「命があるだけでもありがたい」などの声もあり、当初、多くの避難所では授乳スペースや男女別のトイレ・更衣室がありませんでした。



被災者たちに避難所で手芸を教えながらカウンセリングをする女性支援グループのメンバー（2011年6月19日、宮城県内で）

うに工夫をし、多くの方が参加していました。このように女性の人權やニーズに配慮して防災対策を進めていくには、女性の参画が欠かせません。ところが残念ながら防災分野への女性の参画は進んでいないのが現状です（データ）。

国も過去の災害事例で明らかになった様々な女性の問題を踏まえ、政府の防災対策に関する基本的な計画である「防災基本計画」に男女双方の視点等の配慮や、男女共同参画の視点を取り入れた防災体制の推進などを盛り込みました。また、「第3次男女共同参画基本計画」では、防災分野における女性の参画の

東京大学文学部社会科学科卒。朝日新聞社入社。経済部、シンガポール特派員、学芸部デスク、朝日新聞総合研究センター主任研究員、CSTテレビ朝日ニュースター解説委員などを経験。ジェンダーの視点から日本労働市場の変化を報道する。2011年4月から和光大学に移り、働き方の変容と貧困の関係、企業としてのマスメディア論などを専門に研究している。



和光大学教授・東日本大震災女性支援ネットワーク共同代表

竹信三恵子さん

また、炊事当番が当然のように女性全員に割り当てられていました。被災者全員の食事の支度や後片付けをするのは重労働です。女性たちの多くは、子育てや介護だけでなく、被災した自分の家の後片付けなどもしながら炊事当番を担っていました。津波で家族全員を失ったある女性は、昼間は瓦礫の中で家族を探しまわり、夜は疲れきったからだ当番をこなしていました。そんな状況でも、女性の負担を軽減する対策がとられることはなく、日頃の固定的な性別役割分担が災害時にはより女性に重くのしかかることをあらためて痛感しました。

男女が共に参画する防災対策

避難生活において女性のニーズが反映されにくい理由の一つに、避難所運営の責任者は圧倒的に男性が多く、女性が声をあげづらいことがあります。

そんな状況の中、独自の工夫や支援団体による取組みを行う避難所もありました。例えば、体育館などの広い場所では、プライバシーを確保するために、ダンボールを配付し間仕切りを設けるようにしたのです。天気の良い日に布団干しや清掃もかねて、一斉に間仕切りを設置することで周囲の方々からも協力が得られ、スムーズに行うことができました。

また、多くの方が困難な生活に耐えている中では、女性が抱える悩みはなかなか言いにくいものです。女性専用の相談コーナーを設けても利用者の少ない状況が続きました。そこである避難所では相談しやすい環境をつくるため、手芸教室やハンドマッサージサービスを行う中でカウンセリングが受けられるよ

拡大を重点施策の一つにあげています。

女性も防災分野に、と求めると、女性の人材がいらないと言われることも多いのですが、みなさんの地域にも様々な分野で活躍している女性がいます。いざというときにこうした女性の力が活かされるよう、ネットワークを築いておくことが有効です。また、女性も積極的に地域活動のリーダーを引き受けてみるなど、できることから始めてみませんか。

何より大切なのは、家庭、職場、地域における男女共同参画の実践です。一人ひとりが日頃から男女共同参画に取り組むことが誰もが安心して暮らせるまちづくりにつながります。

